

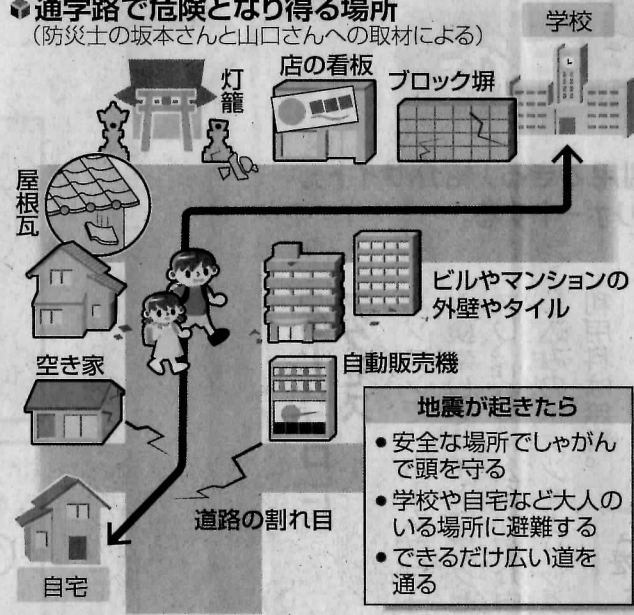
夏休みが終わり、府内の小中学校でも週明けの3日から2学期が本格的にスタートする。6月の大阪北部地震では通学途中の女兒が倒壊した小学校のブロック塀の下敷きになり亡くなった。通学路や校内にはどんな「危険」が潜むのか。1日は「防災の日」。防災士の意見や先進的対策を進める学校の実例から考えた。

(斎藤七月)

防災士同行ルポ

通学路で危険となり得る場所

(防災士の坂本さんと山口さんへの取材による)



茨木市内の小学校への通学路。8月中旬、府内の学校で防災のアドバイスをを行う防災士、坂本真理さん(45)と一緒に歩いた。坂本さんは、看板などが傾き、入り口に「落下注意」のポスターを掲げた食堂を見つけ、こう指摘した。

「店舗の軒先の看板などは地震の影響で傾き、風が強い日などに落下する可能性があります。建物の所有者は不具合があれば修理や撤去をしてもらいたい」

震度6弱を観測した茨木市では、地震から2か月以上経った現在も屋根をブルーシートで覆った建物が点在。瓦や看板が落下する恐れがある建物も残っている。災害時にはブロック塀や自動販売機が倒れることもあり、注意が必要という。

「10番の家」見かけず

坂本さんが一番危険と感じたのは、「子どもが駆け込める場所の少なさ」だった。大人が複数いるコンビニは1か所あったが、子どもが危険な目に遭ったときに避難場所となる「子ども110番の家」の看板を掲げた

家は幹線道路沿いに見かけなかった。「子どもだけで被災した時、近くにいる大人に助けを求めることが大事なのですが……」と坂本さん。

この日は、小学校に娘を通わせる前田真理さん(42)も同行。前田さんは6月の地震直後、学校まで娘を迎えに行った際に通学路のあちこちで屋根瓦が散乱し、水道管から水柱などが上がった光景を目の当たりにした。今回、防災士と歩き、前田さんは「通学路には災害時に危ない場所が多く潜んでいるんですね。事前に通学路を歩いて、チェックしておく必要性を痛感しました」と語った。

看板や自販機 ■ 非常時の駆け込み先 確認を

別の日には、マンションやビルが立ち並ぶ大阪市淀川区内の通学路を、防災士の山口政雄さん(76)と歩いた。山口さんは地震が起これば、外壁のタイルやベランダの植木鉢などが落ちてくる可能性があり、歩行者は力パンなどで頭を守る行動が必要だ」と訴える。

さらにルート沿いには狭い路地に古い空き家もあり、山口さんはこうアドバイスした。「空き家は地震で倒壊して道をふさぐ危険もあり、非常に危険。災害時はできるだけ近づかないようにするのが一番です」

予告せず避難訓練

学校では地震にどう備えるべきか。教員や児童、地域住民らで協力して安全対策に取り組む学校として、大阪教育大が「セーフティー・プロモーション・スクール(SPS)」に認証した大阪市立堀江小学校(大阪市西区)を訪れた。

昨年7月にSPSに認証された堀江小では、各教室に軍手や包帯などが入った防災バッグを設置。児童には、「倒れる物、割れる物、落ちる物、動く物が危険になりうる」と指導し、災害時に校内の何が危険になるか教員や児童が点検を行っている。児童の指摘を受け、金属製の傘立てや棚が倒れてぶつかっても、危険が少ないように角を保護するクッションを貼るなどした。

また、授業中や休憩時間に児童や大半の教諭に予告せずに、地震の避難訓練を実施。これまで児童のそばに教員がいなかったり、廊下の棚が倒れていて通れなかったりと、様々なケースを想定して訓練を行っている。

安全主任の宮崎直志教諭(38)は「何が危険で、どうすれば安全かを考える訓練が、災害時に自らの身を守る力をつけることにつながる」と話した。



通学路を歩きながら、災害時に危険な場所を確かめる前田さん(左)と、防災士の坂本さん(茨木市内)。